

# 学部授業「乳児保育」における保育イメージの具体化に関する一考察

— 現職保育士と連携した授業の可能性 —

塩 路 晶 子\*, 松 下 明日香\*\*

(キーワード：乳児保育, 保育士養成施設, 授業内容)

## 1. 乳児保育のニーズの増大とその対応

厚生労働省の統計によると、保育所等（保育所に加え、幼保連携型認定こども園等の数値を含む）における乳児保育の利用率は年々増加している。平成30年9月に公表された「保育所等関連状況取りまとめ（平成30年4月1日）」によると、0歳児の15.6%（149,948人）、1・2歳児の47.0%（921,313人）が、保育所等を利用している。平成25年9月に公表された「保育所関連状況取りまとめ（平成25年4月1日）」の数値は、0歳児が10.8%（112,373人）、1・2歳児が33.9%（715,400人）であることと比較すると、格段に増加していることが分かる。なお、年齢区分別の就学前児童数は、平成30年4月の0歳児が963,000人、平成25年4月の0歳児が1,044,000人であることをみると、0歳児の人数自体は減少しているにもかかわらず、保育所を利用している0歳児の人数と割合は上昇しているのである。

ところで保育を希望しても入所することのできない待機児童の多くは3歳未満児であり、保育所等の量の拡充が国や自治体によって急務として取り組まれているが、同時に、保育の質の向上もまた喫緊の課題として指摘されている。

このような状況に鑑み、平成29年3月に改訂された保育所保育指針は、「乳児保育」及び「1歳以上3歳未満児」に関して、ねらい及び内容についての記述を大幅に増加させている。

また、「児童福祉法施行規則第6条の2第1項第3号の指定保育士養成施設の修業教科目及び単位数並びに履修方法の一部を改正する件」が平成30年に公布され、平成31年4月1日より適用されることとなり、「乳児保育」（演習2単位）は、「乳児保育Ⅰ」（講義2単位）と「乳児保育Ⅱ」（演習1単位）に改正されることとなった。保育士の養成課程においても単位数を増加させ、授業内容の充実が図られることが企図されていると考えられる。

本稿においては、保育士養成施設において、必修科目

である「乳児保育」の授業を充実するための工夫についての報告を行う。

## 2. 学部授業「乳児保育」の位置づけ

保育士養成施設において、「乳児保育」の授業は、0歳児だけでなく、3歳未満児の保育を取り扱うこととなっている。そこで本稿においても、「乳児保育」と記載する場合には、3歳児未満の乳幼児の保育を指すこととする。

今回の児童福祉法の一部を改正する法律等に伴って、厚生労働省雇用均等・児童家庭局から、「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」とする通知が出されており、その中に「教科目の教授内容」としてモデルカリキュラムの目標が以下の〈表1〉〈表2〉のように示されている。

〈表1〉乳児保育Ⅰ（講義・2単位）

目標

1. 乳児保育の意義・目的と歴史的変遷及び役割等について理解する。
2. 保育所、乳児院等多様な保育の場における乳児保育の現状と課題について理解する。
3. 3歳未満児の発育・発達を踏まえた保育の内容と運営体制について理解する。
4. 乳児保育における職員間の連携・協働及び保護者や地域の関係機関との連携について理解する。

〈表2〉乳児保育Ⅱ（演習・1単位）

目標

1. 3歳未満児の発育・発達の過程や特性を踏まえた援助や関わりの方的な考え方について理解する。
2. 養護及び教育の一体性を踏まえ、3歳未満児の子どもの生活や遊びと保育の方法及び環境について、具体的に理解する。
3. 乳児保育における配慮の実際について、具体的に理解する。
4. 上記1～3を踏まえ、乳児保育における計画の作成について、具体的に理解する。

これらの「乳児保育Ⅰ」「乳児保育Ⅱ」のモデルカリキュラムの授業の目標をみると、「乳児保育の意義と目的につ

\*鳴門教育大学 高度学校教育実践専攻（教職系）

\*\*金沢学院大学 文学部教育学科

いて理解する」といった原理にかかわる事項から、「乳児の発達をふまえた乳児保育の保育内容と環境の構成、指導計画について理解する」「乳児の発達をふまえた保育者のかかわりの基本的な考え方について理解する」といった保育の具体的な内容や方法、指導法にかかわる事項、「他の保育者との連携や保護者等とのかかわりについて理解する」というような保育を行う上での他者とのつながりに関する事項まで、幅広く多岐にわたって学ぶことになっていることが分かる。

四年制大学が保育士養成施設として保育士養成を行うにあたり、1～2年次に保育士資格取得のための必修科目として、保育実習より前に「乳児保育」の授業を開講している場合が多い。

「乳児保育」に関する多くの内容を、大学入学間もない1年次に学ぶには、どのような授業の工夫が必要となるのだろうか。

保育士養成施設における「乳児保育」の授業に関しては、以下のような先行研究が行われているが、そのほとんどが短期大学における乳児保育の授業についてである。例えば、福井(2006)は短期大学の学生が乳児に対して肯定的なイメージをもっていることを明らかにしている。さらに矢戸・坪井(2017)は、短期大学における乳児保育の授業において、子育て支援との体験学習を関連付けた学習プログラムの可能性について述べている。村野(2018)は、短期大学における「乳児保育」の授業においてロールプレイなどの体験やワークシートなどを用いた授業を実施し、乳児保育についての多様な視点の獲得をめざしていることを述べている。また、小林(2018)は、

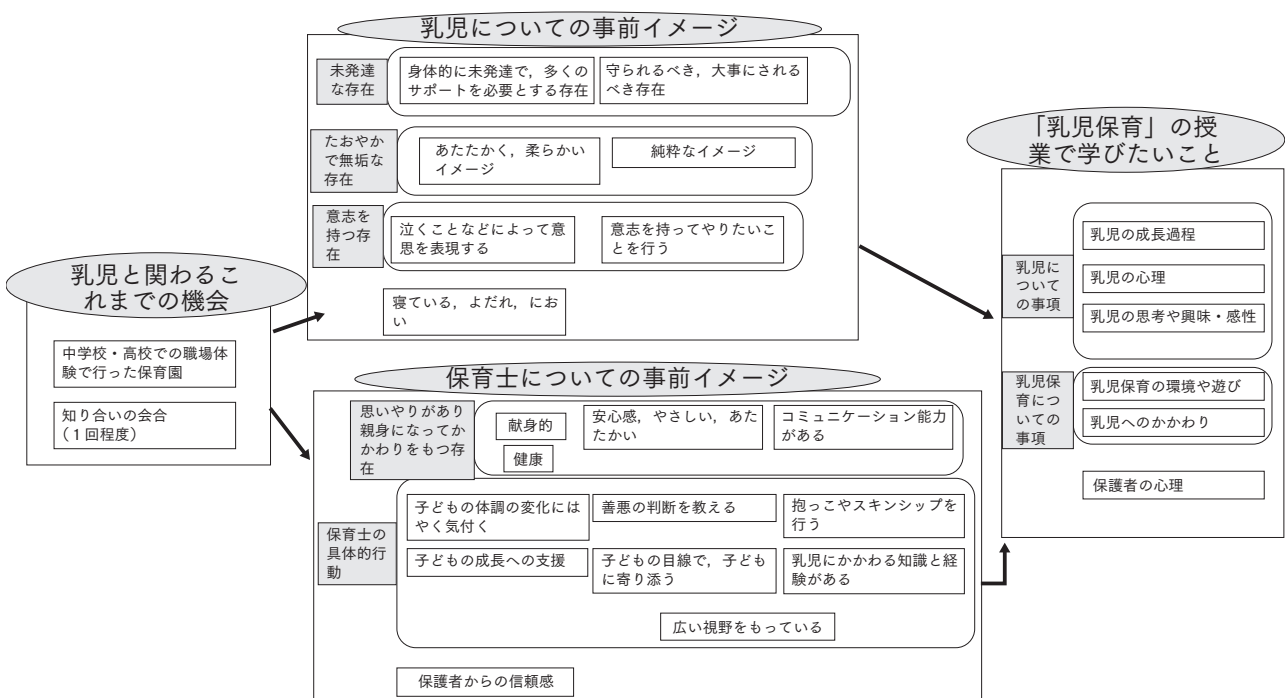
大学における「乳児保育」の授業において、学生の乳児とかかわる経験の少なさをふまえつつ、乳児の遊びを体験する授業の取り組みを報告している。これらの先行研究においては、学生の乳児の関わる経験の不足が指摘されており、それらを踏まえた授業の工夫が記述されている。

学生の乳児にかかわる経験の不足については、これまで筆者も認識し、乳児保育の授業を行っていた。そこで今年度は、来年度以降の「乳児保育Ⅰ」「乳児保育Ⅱ」の単位増加を見通して、「乳児保育」の授業をさらに充実させる方策を探るために、授業開始前の受講学生の乳児や乳児保育に関する経験を改めて把握するアンケートを行った。

### 3. 「乳児保育」についての事前アンケートの結果と分析

4月の「乳児保育」授業開始時に、受講生に対して乳児や乳児保育へのかかわりについてのアンケート調査を行った。アンケートに記述された自由記述について、KJ法により分析を行った。自由記述を切片化し、ラベルを付けた後、グループ化を行った。ラベルとグループを図解化したものが〈図1〉である。

〈図1〉に示したように、学部1年次に大学で「乳児保育」の授業を受講する前の、学生の乳児と関わった経験としては、中学生の時の職業体験や、知り合いの会合など、1回程度の機会しかもつことができていない。これから乳児保育についての専門的な内容を学ぶための前提



〈図1〉学生の乳児・乳児保育についてのこれまでのかかわり

となる経験としてはかなり少ないといわざるを得ない。

このかなり少ない経験にもとづいて、学生は、乳児の事前イメージとして、「身体的に未発達で、多くのサポートを必要とする存在」「守られるべき、大事にされるべき存在」といった、〈乳児の未発達さ〉に着目したイメージをもっていることがわかる。また、「あたたかく、柔らかいイメージ」「純粋」といった〈たおやかで無垢な存在〉と乳児をとらえている。一方で「泣くことなどによって意思を表現する」「意志を持ってやりたいことを行う」といった、乳児であっても〈意志を持つ存在〉としてとらえている。

さらに学生は、保育士についての事前イメージとして、「献身的」「安心感、やさしい」「コミュニケーション能力がある」「健康」といったイメージを抱いており、幼い子どもにかかわる保育士を、〈思いやりがあり親身になってかわりをもつ存在〉ととらえていることがわかる。さらに、「子どもの体調の変化にはやく気付く」「善悪の判断」「抱っこやスキンシップ」といった〈保育士の具体的行動〉についても想像し、「子どもの成長への支援」「子どもに寄り添う」「広い視野」「乳児にかかわる経験と知識」というように、保育士を専門職としてとらえている。また、子どもだけでなく「保護者から信頼感」を得ている存在であるとも考えている。

以上のような乳児と保育士についての事前のイメージを踏まえて、学生たちが「乳児保育」の授業で学びたいこととしては、「乳児の成長過程」や「心理」「思考や興味、感性」といった〈乳児についての事項〉、「乳児保育の環境や遊び」「乳児へのかかわり」といった〈乳児保育についての事項〉、さらに「保護者の心理」という保護者に関連する事項を挙げていて、幅広い学びを期待していることがわかる。

#### 4. 「乳児保育」における授業の工夫

アンケートからも明らかになっているように、学生なりの乳児や保育士についてのイメージにもとづいて、幅広い期待をもって授業にのぞんでいるものの、学部1年生の乳児へのかかわりの経験は、かなり少ないといわざるを得ない。

一方で、「乳児保育」2単位の授業において（2019年度からは「乳児保育Ⅰ」（2単位）「乳児保育Ⅱ」（1単位）において）、先に述べた幅広く多岐にわたる内容をすべて習得することが求められており、保育実習を行う前の学部1年生にとってはハードルが高い課題となる。その対応として筆者も「乳児保育」の授業におけるさまざまな工夫について、これまでも考えて手立てを講じてきた。例えば、乳児保育についてのビデオ等の映像資料を授業の中で用いることはもちろんであるが、それだけで

なく、学生の体験を増やすために、親子で大学に来学してもらい、学生が保育を計画・実施する「赤ちゃんサロン」（現在は「すくすくサロン」に改称）を後期の「相談援助」「保育相談支援」の授業担当者と共同で、月1回程度開設し、1年生前期から保育にかかわる機会を設けている。「サロン」の意義についてはすでに木村・塩路・佐々木ほか（2013）や、木村・塩路（2016）が報告しているが、大学における親子の「子育て支援」的な場でもあり、保育所における「乳児保育」の場ではないという限界もある。特に、モデルとなる保育士の存在を明確に位置づけることが課題として残されている。

保育所における「乳児保育」への参与観察等は、時間割上の時間的制約や、乳児の感染症への危機管理もあるため容易ではなく、授業である「乳児保育」での実施は今のところ困難である。そこで今年度は新たに、現職保育士によるゲスト・スピーカーの講話を、授業の中で聞く機会を設けた。

#### 5. 現職保育士による講話内容

講話を依頼した現職保育士は、乳児保育にたずさわり、保育士経験3年目である。長年の保育経験を有する熟達した保育士よりも、3年目という若手保育士のほうが学生にとっては身近で、保育士のイメージを具体化しやすいのではないかと考えて、依頼した。講話は9回目の授業で実施し、学生は座学を中心に乳児の発達や遊び、保育の環境や指導計画などについて学んでおり、「すくすくサロン」はこの時点では未経験である。

現職保育士による講話内容の概要は以下の通りである。

「現職保育士が考える子どもとは、保育士とは、保育とは」という題目で講話を行った。（…中略…）  
はじめに、乳児保育の現場をイメージしやすいよう、自己紹介として、これまでに担任したクラス及び、クラスごとの子どもと大人の人数配置、低月齢児、高月齢児に分かれたグループ保育であること、保育室の使い方などを伝えた。  
保育園で取り組んでいる保育内容の紹介では、泥んこあそび、リズム運動、製作をしてあそびにつなげる「作ってあそぶ」、ごっこあそび、描画、食育を挙げ、保育の様子を伝えた。リズム運動や描画も、月齢に合わせた形で0歳児から取り組んでいる。それらの活動の中で大切にしていることや、育みたいこととして、以下の点を挙げた。大人中心ではなく、“子どもにとって”何が良いかという視点を大切にしていること、乳児期は自我の形成にとって重要な時期であり“ジブンデ”の気持ちや育つ主体的な生活をつくっていること、集団の中で力をつけること、保育園は保護者の就労支援を担っており、親子で一緒に育つことである。  
具体的な保育の様子として、写真を交え保育実践を紹介した。散歩先で出会っただんごむしを題材に、だんごむしの製作をして、それを子どもがいつでも取り出せる作品入れに置いている。自由遊びのなかでも、制作物を取り出して、だんごむしごっこを楽しむ姿がある。また絵本「ころちゃんのだんごむし」にも親しみながら、新聞紙ぎりぎりの大きなだんごむし作りや、青虫の飼育経験を経て、ちょうの製作をしたことなどを通して、あそびをどのように展開するかを例示した。（…中略…）



保育とは、という点については、これまでの保育士生活の中で感じた、保育とはチームワークであるということ述べた。(…中略…) クラス運営では、クラス全体の活動を導く役割と、個別対応が必要な子どもに関わり、掃除や片付けといった事柄を中心に担う役割を分担している。また、常時子どもが在園する中で、午睡中に職員が休憩をとり、会議等も行うことから、複数担任クラスからクラスへ応援という形で入り、会議等を運営している。(…中略…) また、乳児保育は複数担任が基本であることから、ベテラン保育士の元で教わりながら保育を学べるよさがある一方、複数の担任と意見をすり合わせながら保育をつくる難しさや悩みもある。

子どもとは0歳児であってもしっかり意志を持っており、決して大人の思い通りにはできない立派な一人の人である。“子どもにとって”を一番考える存在でありたい、思いをもって保育し、保育士として成長していくことを大切にしたいということを伝えた。

さいごに、保育士は自分の長所も、時には自身が短所と捉えていることも活かせる仕事である。必ず活かせる部分があるので、得意なところから保育の学びを広げてほしいという学生へのメッセージで締めくくった。

質疑応答では、「なぜ制作物を子どもが自分で取り出せるようにしているのか」、「偏食への対応」、「なぜ幼稚園やこども園ではなく、保育園を就職先に選んだのか」等の質問に回答した。

## 6. 現職保育士による講話についてのアンケートの結果と分析

現職保育士による講話の実施後、受講学生に対してアンケートを実施した。アンケートをKJ法で分析した結果、下記の〈図2〉のように概念図を作成した。

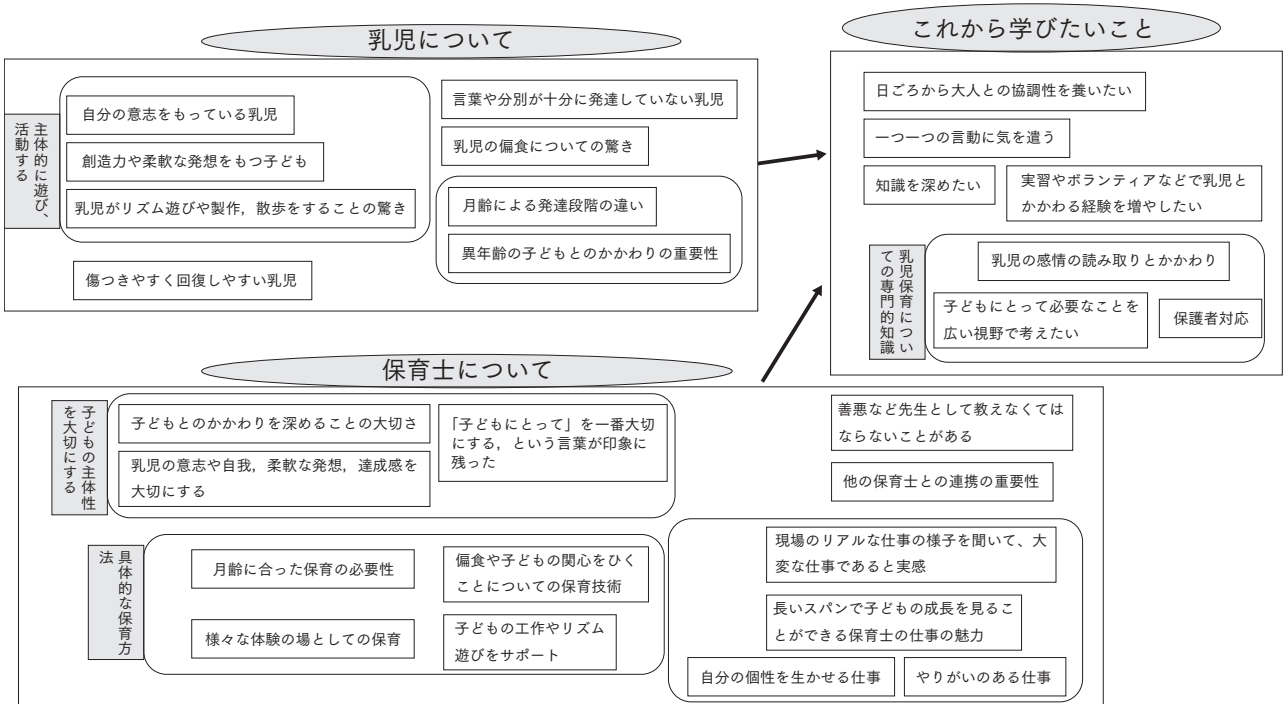
現職保育士の講話を聴いた受講学生は、まず乳児について、「自分の意志をもっている」「創造力や柔軟な発想をもっている」「リズム遊びや製作、散歩をすることに驚いた」といった、乳児が〈主体的に遊び、活動する〉こ

とについて驚きをもって認識している。「言葉や分別が十分に発達していない」といった乳児の身体的・精神的な未発達さについての言及もあるものの、それ以上に、乳児が自らの意志を持って乳児なりに考えたり発想したりして、様々な遊びに取り組む存在であると理解したのである。さらに、「月齢による発達段階の違い」なども改めて認識している。これらは現職保育士の講話の授業より前の回に、講義の中でも説明した事柄であるが、現職保育士による具体的な乳児の姿についての語りにより、よりリアルなものとして学生に受け止められたものと考えられる。

また保育士については、「子どもとのかかわりを深めることの大切さ」「『子どもにとって』を一番大切にする、という言葉が印象に残った」といった、子どもとのかかわりにおいて保育士が〈子どもの主体性を大切にする〉ことに焦点をあてて学生は認識していた。これは保育士にとって最も重要な保育姿勢の一つであり、現職保育士が語ったこの内容にこそ学生が着目しているのである。この保育姿勢にもとづいて、「月齢に合った保育」「保育技術」といった〈具体的な保育方法〉の一端を知ることができたことも学びであったとしている。

さらに「他の保育士との連携の重要性」についても学生は着目しており、乳児にとっての有意義な保育を行うためには、他の保育士との連携が不可欠であることを学んでいる。

現職保育士による語りは、学生にとっては「現場のリアルな仕事」を実感させ、そこから「大変さ」だけでなく、「魅力」や「やりがい」もまた感じ取っている。



〈図2〉 現職保育士の講話を聴いて学生が考えたこと

これらのことを踏まえて、学生がこれから学びたいこととしては、「日ごろから大人との協調性を養いたい」「一つ一つの言動に気を遣う」といった乳児の保育士になるために必要な態度を身に付けていきたいと考えている。保育士は他の保育士や保護者とのコミュニケーションを行うことが不可欠であるため、学生のうちから大人同士のコミュニケーション能力を養うことが大切であると考えたのであろう。さらに、「乳児の感情の読み取りとかかわり」など、〈乳児保育についての専門的知識〉を身に付けることも学びたいことに挙げている。現職保育士の講話は、具体的に分かりやすいが、そこで語られる乳児や遊びの様子は専門的知識に裏打ちされたものであることが学生にもわかり、その必要性を痛感したと思われる。

また学生自身が自らの経験不足を痛感し、「実習やボランティアなどで乳児とかかわる経験を増やしたい」としており、乳児の姿を理解するための知識を身に付け、保育の専門的技術を向上させるためにも、ベースとなる「乳児とかかわる経験」を積みたいと思ったのであろう。

先に述べた「乳児保育」の受講開始前に学生に対して行ったアンケート調査の結果と比較すると、現職保育士の講話後には、乳児という存在が意志をもった主体的存在である、というイメージがより具体的にふくらんでいることが明らかになった。また、保育士が乳児の主体性を中心とした保育を行うためにはどうすればよいか、ということを保育姿勢とする専門職であることも理解しつつあることがわかる。専門職となるためにも、日ごろからの大人同士のコミュニケーションをとる姿勢なども身に付けていくことへの意欲もわいている。それは授業の中で「教えてもらおう」という受け身の姿勢ではなく、自ら学ぶことへのきっかけを掴んでいるといえるのではないだろうか。

## 7. まとめ

以上のように、必修科目である学部授業「乳児保育」における授業を充実させるための工夫について述べてきた。受講生が大学1年生の場合、乳児にかかわる経験や、乳児保育・保育士についてのイメージが不足しており、授業において専門的知識を学ぶ上では、それらを補うことが必要である。現職保育士による講話は、今回は一度であるため、モデルとなる保育士の存在として位置付けるところまでには至っていない。しかし、乳児保育や保育士のイメージを形成するための一助となるのではないだろうか。大学1年生の授業においては、イメージの具体化とともに、今後の学びを深めるための動機付けを高めることも重要である。乳児保育の重要性が増す中で、保育士養成施設における授業単位も増加するため、授業を充実させるためのさらなる工夫を行わなければならない。

## 文献

- 木村直子，塩路晶子「乳児への保育実践力を身につける授業の可能性：大学内の赤ちゃんサロンに参加した保護者への調査から」『鳴門教育大学授業実践研究』15, 3 - 8, 2016 年
- 木村直子，塩路晶子，佐々木晃，藤原伸彦，谷村千絵，浜崎隆司，田村隆宏，松崎美穂子「乳児への保育実践力を身につける授業の試案とその成果：大学内での赤ちゃんサロンでの取り組みから」『鳴門教育大学授業実践研究』12, 3 - 10, 2013 年
- 小林美花「乳児保育の理解に向けた授業の考察」『北翔大学教育文化学部研究紀要』(3), 131 - 137, 2018 年
- 穴戸良子・坪井真「乳児保育に関する体験学習の教育効果」『作新学院大学女子短期大学部研究紀要』(1), 35 - 46, 2017 年
- 福井逸子「保育系学生における乳児に関するイメージ調査」『北陸学院短期大学紀要』38, 115 - 122, 2006 年
- 村野かおり「保育士養成科目「乳児保育」における視点の獲得に関する検討ーワークシートと学習形態に着目してー」『駒沢女子短期大学研究紀要』51, 53 - 64, 2018 年

